

むのは容易ではない。この点は、16世紀末にスペインの僧侶の残したタガログ語の祈禱書などの場合と事情は変わらない。その後、タガログ語、イロカノ語などの場合は末尾子音を表わす工夫が多少見られたが、マンヤン文字の場合は今日までその必要性を感じていないようである。

上述のように、マンヤン文字組織では、音節末尾の子音を表記する手だては講じなかったものの、母音 *i* と *u* の違いは、判別音符を基本形の上と下につけることによって表わすことができる。これも、16世紀末のタガログ語訳「主の祈り」などと同じである。このポストマの説明と異なって、コンクリン (Conklin, 1953) は、その短い棒(判別音符)はそれぞれの基本形の左と右につけるとしている。この説明の違いは、コンクリンはポストマの文字を90度左に回転させて見ていることに起因している。文字には固定した位置がなく、どの方向からでも文字を読むことができるのである。この判別音符は基本の文字から離してつけるのが本来の方法であるが、1つの文字としてしばしば基本形に続けて書かれる。この方法は、インドネシアのプギスや南スマトラの書記方法にも見られるものである(プギス文字、スマトラ文字)。

宮本(1986)によれば、1973年頃には、ローマ字と紙とボールペンの普及による新しい字体が若者の間で一般的になっていた。これは文字を左から右に横書きし、行を上から下に移すのに都合のよい字体であるという。

ポストマによれば、この文字組織が今日まで継承されてきた理由は、それに代わる文字組織が導入されなかったこと、日常生活における効率のよい意志伝達手段であること、そして、伝統的な韻文を記憶する有効な手段であること、などである。フィリピンの他の地域と違って、スペインの影響がなかったため、ローマ字との接触がなかったのである。アラビア文字との接触もなかった。また、コミュニケーションの手段として使われる文字の刻まれた竹筒は、道端の杭に掛けておけば、道行く人によって10 kmも離れた宛先に1日から3日くらいで届く(図1)。もっとも、最近では島の低地から来るキリスト教徒やその他の人々の好奇心から、それが捨てられたり、持ち去られたりすることがある。また、次第に竹に代わって紙が使われるようになった。

【アンバハン】 伝統的な韻文(8音節詩のウルカイ urukay, 7音節詩のアンバハン ambahan)は竹筒に繰り返し刻まれて今日まで継承されている。これは、しばしば象徴的に求愛や恋人を讃える詞として唄われる。アンバハンの方がウルカイよりよく用いられる。アンバハン南部地域のマンヤン族の老若男女の約80%が

図1 竹に刻まれたマンヤン文字のメッセージ



出典: Postma (1983) .

知っており、人口の約70%が文字の知識をもっている。文字は観察し、真似をし、人に聞いて覚える。学習のための組織的な教育があるわけではない。

図2は、竹筒の表面に音節文字を刻んだものである。これは檳榔子を噛む時に用いる石灰の粉を入れておく竹筒(高さ13 cm)に書かれた一区切り7音節からなる比喩的表現を駆使したアンバハンである。タガログ語などからの借用語は使わず、ハヌノオの古語を使う。楽器なしで詠唱される。

図3は竹片(長さ25 cm)に書かれたアンバハンで、一区切り7音節からなり、すべて *an* の脚韻を踏んでいる。文字は音節末尾の子音を表記していない。前後の脈絡から判読する。竹片の1段目左から読む。ポストマ(1972)によると、次のようになる。前後関係から補った音節末尾の子音は、カッコの中に入れた。7音節ごとに行を改めて書き、日本語訳を添える。

Si a(y)po(d) ba(y) upada(n)
 No ka(ng) tinagi(n)duma(n)
 Ma(y) ula(ng) madi ka(g)na(n)
 Ma(y) taki(p) madi ka(y)wa(n)